

報告概要

塩出浩之（京都大学大学院文学研究科准教授）

『引揚・追放・残留』は、20世紀の国際政治における住民移動政策に関する比較研究を通じて、日本人の引揚（送還）が有する世界史的な意味を明らかにした画期的な共同研究である。本報告ではまず本書が、第二次世界大戦後のドイツ系住民と日本人に対する強制移動政策に関して、国民国家イデオロギーに基づく国際秩序の再編という意図を明確に指摘したことについて、その意義を改めて確認する。

その上で問いたいのは、ドイツ系住民や日本人が経験した強制移動が、はたして第二次大戦直後という状況の特異性のみによるのか、という問題である。我々が生きる近代世界でグローバルなヒトの移動を規定してきた「国境と国籍」について、本書を手がかりとして考察したい。

【参考】

- ・塩出浩之『越境者の政治史：アジア太平洋における日本人の移民と植民』（名古屋大学出版会、2015年）
- ・塩出浩之（編）『公論と交際の東アジア近代』（東京大学出版会、2016年）

錦田愛子（慶應義塾大学法学部政治学科准教授）

戦争やその終結によって、人はときに大規模な移動を強いられる。その背景は個別に様々だが、体制崩壊や脱植民地化といった共通の政治的文脈は、類似点を生むこともある。本書における、それら国際比較の試みに対して、本報告では中東パレスチナの難民を研究してきた立場から、その意義を評価する。戦後東アジアにおける日本人の引揚と残留をめぐる問題は、日本人であるわれわれにとって特別な位置づけで捉えがちである。しかし、本書で指摘されるように、第二次世界大戦後は住民移動・住民交換をめぐる思想が、通奏低音として大陸の東西に波及していたとも考えられる。地理的中間地点に位置する中東もその例外ではなく、イスラエル建国に伴うパレスチナ人の難民化と、アラブ諸国からのユダヤ教徒の追放は、ある種の交換と捉えられることもあった。だがその評価は政治的に中立ではない。比較の枠組みは国際人口移動の新たな理解のため、どこまで有効なのか、考察を試みる。

【参考】

- ・錦田愛子（編著）『政治主体としての移民／難民一人の移動が織り成す社会とシティズンシップ』（明石書店、2020年）
- ・錦田愛子（編著）『移民／難民のシティズンシップ』（有信堂高文社、2016年）

成田龍一（日本女子大学名誉教授）

日本で「引揚げ」が話題となったのは、1949年前後のことである。藤原てい『流れる星は生きている』が49年4月に出版され、同年9月には映画化もされ評判となったほか、多くの引揚げの手記が刊行されている。現在に至るまでの「引揚げ」像は、この時期の著作が原型になっているとあってよいであろう。いずれも「逃避行」を軸にし、おりからの冷戦体制の始まりの時期の痕跡を有している。

こうした「引揚げ」像をもつわが身にとっては、蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介編『引揚・追放・残留』（2019年）は、ヨーロッパにおける「追放」を比較の視点とし、（日本における）「引揚げ」の歴史像を大きく揺るがす著作として登場した。冷戦体制崩壊後の「引揚げ」研究が、開始されたということになるだろう。かつて「「引揚げ」という問い方」（2003年）を提出したが、「「引揚げ」という問い方・再論」として本書に向き合ってみよう。

【参考】

- ・成田龍一『増補「戦争経験」の戦後史』（岩波現代文庫、2020年）
- ・成田龍一「「引揚げ」という問い方」（『思想』第955号、2003年）

野村真理（金沢大学名誉教授）

革命と第一次世界大戦により、ロシアやオーストリアという歴史的帝国が崩壊した後、「民族自決」は、戦後ヨーロッパでの新国民国家建設における基本原則となる。しかし、民族が混住する東欧において、民族自決は、所詮、実現不可能な原則であった。少数民族問題は、国内政治、国際政治の安定を揺るがせ、これを暴力的に解決したのが第二次世界大戦後の国境線の変更、住民の追放／移住、住民交換に他ならない。これら方策のいずれによっても解決不可能であったユダヤ人少数民族問題は、ホロコーストによって消滅させられた。

他方で、戦間期はその大部分が植民地であったアフリカやアジアに目を向けるとき、第二次世界大戦後の植民地帝国の解体において、民族自決はもはや適用可能な原則とはなりえない。旧大日本帝国からの日本人の引揚は、方法的には第二次世界大戦後の東欧からのドイツ人追放／移住を適用しつつも、理念的には異なる歴史認識に基づくべきものであった。

【参考】

- ・野村真理『隣人が敵国人になる日—第一次世界大戦と東中欧の諸民族』（人文書院、2013年）
- ・野村真理『ホロコースト後のユダヤ人—約束の土地は何処か』（世界思想社、2012年）

西成彦先生（立命館大学大学院先端総合学術研究科特任教授）

「外地日本人」の引揚げと、東方在住の「民族ドイツ人」の被追放を重ね合わせて論じる試みは、比較史の試みとして至極妥当だと思う。しかも、東アジアの外地文学を読み解

こうとする戦後日本の動きのなかでは、ドイツ語圏文学者以上に、フランス語圏文学者（鈴木道彦、渡邊一民、鶴飼哲など）の仕事が、先駆的な役割を果たしてきたことを思うと、『引揚・追放・残留／戦後国際民族移動の比較研究』の編者に松浦雄介さんが加わられていることに快哉を叫びたいと思う自分がある。さらに言えば、1974年のカーネーション革命までアフリカ植民地を手放さなかったポルトガル系の引揚げにも一章が割かれていることにも私としては感動を覚えた。しかし、であればこそ、旧入植者がいまなお平然と「残留」している英語圏・スペイン語圏・ロシア語圏の地域研究者との連携が、さらに次の一歩として構想されるべきだろう。「引揚・追放」に添えられた「残留」という居住形態のなかには、「居座り」というもうひとつの形があり、それはつねに不問にされがちなのだ。

【参考】

- ・西成彦『移動文学論（II）エクストラテリトリアル』（作品社、2008年）
- ・西成彦『外地巡礼／「越境的」日本語文学論』（みすず書房、2018年）